



中村俊定文庫
文庫 18
53
4



世話盡卷第五

皆虛述

廿九回文詞

院定藏

父母耳挑篠良鈴

煤俣本美獅子馬場

加久ハカク斗ハカク不ハカク違ハカク祥ハカク神ハカク幸ハカク春日ハカク

新田竹田武田名花

薺切木色紙南后

夫婦親子玄名節白

夜野小猫心立清思

不如木釘功德漸出

氣盡位階為縣碎瀨

院定藏

隣里 宇宙 雨中 田歌

前世 儀式 三隅 海道

漸風 意さ 去め して

とどく ときこ 西よ ろく為

目さめ いで湯 力こも 啼ち

野の くらぐ ともど 花ハ

鳥と 照て 四の字 うねり河又 教ふ唯之

可来多しひうらりは湯ハゆりしと及 ちうらるる遠いといふしん保人さる也

津の勢 花の香 月よ暮 津る常

たり暮さ 志る途 思く此 のひく乃

は井筒 包う 梅系 柿の事

流介 ちまや ちんた 捨の火

もくハ 志れ 野風の 出ま

品味 座の琴 け五文字を添限也 故三具三裁之違ま

上之五文字 下之五文字

中ま じ きうじ 卯

照りて 葉所 月照りて

菅の葉 坂の下 じ

田ハ月ウ 杜のあ

けさ けさ 恒さ

中ま ちや 薪ハ 水

ふた 提也 ちんた 月

繩の侘

枇杷の花

瓜琴

男松

南の目

日の南

十の音

鏡の音

村ぬや

やめさじん

名ハ條外

魚の花

三ののま

流の雲

先さう

うーま

ふんふん

ふんふん

まなせら

やんせら

村さう

あさじん

これ月日

ひんせら

てんてん

はなれて

流串

時ぬや

名が敵

まなせ

白ぬや

やうあし

かたさや

やんせら

夜更の垣

星月夜

中之七文字

花のいさ

竹の根のいさ

空のふれ

空のふれ

物家の孫

空のふれ

くさくさ新

川登るあ

月日のひま

形かをみろ

使ひし馬

らかりあむこと

山へさや

あふむくさふ

海山焼川

宿を推の戸

くさくさ白菌

削切付

竹を焼く

病のしや

くさくさハハハ

昔里切ら

笑る奥腰

菅笠が下り

仕合ハア

甚花人

日影の影

柳ハ笑るや

おねのね

雪くくと流

あふむくさ

橋本ハア

くさくさ

他母ハア

あふむくさ

中あそくさ

のふさくさ

あふむくさ

本陣とくさ

子親とくさ

おのねの

あふむくさ

山非ひや

あふむくさ

名ハ何名花

雪日の目流

目の下あび

泣る子啼

あふむくさ

月影の影

鳥とりもどちち けけと張はりけけ

包つみここけけ へへきき泣なくく

利り教こうけけりり 雁かりううきき飯いりり

切き徳とく徳とく 鴨鴨ううききああららやや

ままじじきき風ふう 素す原げんままふふ

本ほんののままはは葉はのの 毛もうううしし中ちゆう野や芝し

軟なん文ぶんてて真まよよ 川かわ敷しらららら

梅うめやや流りゅう通つう 名な上じやう波は

伴ばん来らい書しよ流りゅう 白はく雲うんくくじじ

舞まい入い使し恨げん 比ひ難なんおおくく不ふ及及我がのの地ち

と送とれれたた皆皆下下るる也也

上之七文字 下之七文字

くくままつつおお せせううらら月げつかかまま

櫻おう切きききくくかか 鳴なききららくくもも

そそののけけ虫むし ままじじたたのの音ね

清せいららのの音ね 水みづのの音ね

機き嫌きらままふふをを 夕ゆふををけけりりやや

見みゆゆららんんままじじ 志しららしし法はうらら

ひひええののけけききくく 汲ひ酒しゆのの聲こゑ

祈いのちちははままふふ 春はるのの物ものああ

友ともののままつつふふ 去き月げつのの下した

見みままいいのの名ないい 花はなののうういいままいい

とつて見ゆへ 強弓と月

表色と月 月と表色

名いふと業ハ 美草美草の花

梅の背殿を みるく 葉葉

首途そのび 結の袖

又田文と云ふは美之禹像云々は
と云ふやうに念ハ何と云はれ
つりきつはけりて終つては念
三五と奉てあげ他と准多也
又田文あれとて常々、津路と
漏ておのゝまゝと求るやうに
作るといふ可きや他如常
詞又如何とあらう其甚極し但面
八分と云てハ一巻に二分五分計

ハゆひは支鉄奈向中月ゆらく
まへつは信へしく清濁を
くろしくもどろろとる也句
之仕を極ハ少口傳は及ふハ候
余られども田文ハ別て好ハ三物
みも非とらん及又付ハもあう
して又一向とらさくしくハ
乞む也又字人も俵物也一真
とつて程程作られしとて前後
と賦の内ハ極行ハ三物也唯
半津路と云ふは清しくせんら
真と云れん句をさへして也
一とハ信へしハ支津路と云ハ
常之候様と云て何の凍結と
真と云ふは苦き事やう通
行よりハ神あうひよと津路と
らんといふ事やうといふ人様と
アとて胸を付てあわ或ハ後

ちよとてうし又或ハ中將場
 多戦るどいへる二白つまのそ外
 月次たたのの一舎乃海つさ湘
 洛でんそて五白十白を格だれ
 ともその名世もえくはあられ
 中はの人面八白と定ていふと
 世人真りありあふ百韻
 考るるいふる或ハ回文懐紙五
 音やけいおし流布とて若ハ回文
 るといふるゆゑ人といふ首二首深
 してハそそとて世一觸れといは
 津山也平湘洛高巧者の柔和
 ちる目と開てまゐの戯とと
 多きゆりあひ世を面白くしん
 我あといふの湘洛いふをれい
 足耳目と佳てえいふるもや
 奥とらりてんあはれなま
 仙湘洛ちと名付てと平六白と
 一書めとまうたれし飽ん之
 るとゆんるるとまひの加之巧
 者程其得かまるとんくつと
 吃字野口也

回文湘洛 奈何 皆虚

きのまひうほち蓋揚棋子本
 松戸やかりとま一郭公
 おとらわ村魚さんやとる
 是はのびと強乃ほあこさ
 又めいしはう歌中てああま
 とうまといふこれ新とこれ筆
 志ぬらう信とてはいわじ

酒飲と伊勢折文の如家沙夜
 楽舞にやあうさうさの
 新枕
 待日のあうさうさあ
 びんそそ同まやいせあ
 びん
 ぞらあや中いさう
 びん
 なのま川遠うさう
 びん
 なる帆屋條乃野
 びん
 大形
 ぞのなる海客さ
 びん
 断波の音
 水乃あはれ遊く
 びん
 野そんさう
 びん
 びん
 びん

二
 志の悔もか
 罪のさげとも
 人の名さ
 ちか
 神
 出木
 小原
 持
 橋
 月
 水
 日
 大
 報

とくもつらふらふと時をまわす
つらふらふ 勝負つる道と軍
つらふらふ 本が名に知る切し花垣
つらふらふ 村らし清山や雪まじむん
つらふらふ 〇まゝぬさるまき

凡そつらふ彼名ふじつひ立産
つらふらふ とや月にはくあ鳴の燕とと
つらふらふ ぬは酒よりさふくしき用のる秋
つらふらふ 上は此能とつらふと別あふ下
つらふらふ 一或人び証る田文海瑞歌とと
つらふらふ 消雪
つらふらふ 〇いしれいしるもさし

くしあゆむ名のとく名

名花

名はくともあはれとらとととと
名花 五年めらつるそのあともとと
名花 一又予く住軒のほくは松打獲
名花 て折しとさるりぬるせは

法甲の松

名のはまらぬ色くと日丸のひわ
法甲の松 軒ひやうふとさる松の本
法甲の松 三十 教句帖 皆産

森之部

鳥

方東の先なる乃 〇まよふ

梅

里のさや梅を理や花はら
月中木は梅咲さるん軒橋
 船梅は定津通や羽もさ
 結梅と鳥梅とを何敷くは
らん金衣をも白衣もあき梅の花
 梅の事と字編とせうか梅がじ
 梅うねや竹川越り旬宮
 ちの梅と笑と字にし其音
 子日
 善因のさくら松のぼのり

子れ白あて松もさゆら
四文あき葉 付七草
 ちか網のあもさひあつぬ
五音あま毎にさるぬあまの葉
同摘んもあまのさるぬあま
童童きに摘せさるぬあま
旧あまのけとあてあまのさるぬ
 寺てさるぬあまのさるぬ
 霞

田文曰、
此の條、
氣多ふおのこころの如き也

春雪

田文曰、
消く雪やと屋清砂と雪
白波乃と雪の漢雪の如き
と雪よりと雪の目天と雪女

海潮

去らも海潮十八と雪の如

追善

河のたなをさうとさきん高仏
経ふ洗白佛や実雪佛

砂の雪の如き川は如きと雪
と雪と雪の汁也と雪の如き

柳

風神の鬼にさうもさう柳
波のさう波や出来さう柳
風人草うとさう柳のやう柳
松のさうにせとさう柳のやう柳

春雪

田文曰、
春の雪はさう柳のさう柳
目乃凝の雪をれ加減とさう柳
と雪はと雪の如き白柳

流るる水は舟のつらき舟乃昔年
 長水野海生れ方乃のちと
 梅のあはれく木く右のさくらさ
 ぬ家のあはれく膝て出さや去
 なる六十七八そよあそそ
 月のあはれ地獄う遠乃鬼前
 ありさきおたてせほをされ
 ぞう風て打さくらぬ家好胡蝶
 己が住所をばぬぬや虎の杖
 けして白雲舞いさあそり
 ぬとさう風ははらうさ
 たりあつらひのあそそ焼
 野梅のあはれあそそわ
 折ん中であそそ
 月あはれあそそ

攻雁 付 雛子 燕

るるささのささのささのささ
 梅もろも二月はゆかひん
 西文 雛子のあはれ地獄のあはれ
 雛子のあはれ地獄のあはれ
 雛子のあはれ地獄のあはれ
 雛子のあはれ地獄のあはれ

桃 付 杏子 李子

千色を名あけ浪う柳の花
花から紅きぐく雲より空の赤
答じようのふあんと此花の風
紅粉て只とへしほさめ此花

花 付橋 雲花 海棠

外此名を隠よるひろ花のうか

泳とあつたやあてて花車

友の名をうんごあし花の下

流る流花の各のあつた

楽さ由やカレとつて山橋

天下の目本ひく花のま

一時的千金の花のま

女流の川をてまは花の枝

三本のやれをうとう花の風

雨落るあててらうぬ花とら

まをれが剛て後ハカ花の

或亭よる花枝と申しと下
枝とに一輪はく咲くこととて
は初とを奈白せうとまし

一巻にいひくく一花や天下一

火橋ふぬをべんやとら松

音よ打折 向のぬきとら

くろくまて乃よ一也いの梅
乃乃やちと遠ひら花
白たの敷いや梨乃花のつが
雲うのま後まのめ橋つ
海棠う花は乃はははくは花は

蛙

秋あのい裁の乃の乃の
花は根ね乃の己の乃の乃の

雲雀

乃の乃の乃の乃の乃の
乃の乃の乃の乃の乃の

平春

人の乃の乃の乃の乃の
乃の乃の乃の乃の乃の
乃の乃の乃の乃の乃の
乃の乃の乃の乃の乃の
乃の乃の乃の乃の乃の

其之部

杜若 付二八

池の乃の乃の乃の乃の

色もあつたに何ふらうもさうくつて
は糸の薄紙や似あつて金こ
つらひを已う申てらふもあつた

牡丹

付芍薬芥子

咲をれぬとや人の牡丹草
折きしとやあをくやむもあつた
目のまもとらうして所を迷はれ
ぬく所やせんは花のあつた

卯花

付標 友之木

申さうと標しぬあつた
めいさうと標しぬあつた

さうさうと標しぬあつた
定家さうと標しぬあつた
山とや里でいふあつた
卯花の散らぬあつた
あつた物なれなやあつた
吹らぬ風と標しぬあつた
くらあつたあつたあつた

郭公

付虫

あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

音いらしき高はれそめい路のり守

雲れ二葺ふたう也ととくそ人

月よあそそ程時とては難得うふ

名西もいぬ方名や寝静の時鳥

うそあそ寝られぬねれ程加を

昔乃屋や室乃火用公也教取

字ハ歌集ハハ麻乃火とる所

字ゆと巧とぬとるれいり亦

あ行↓并 文答中因実

あ行あまのりりともてふそらそ

とくもまこも也波やいひまも葛

泳もも月あそめいひもるめ亦

もみいあそつとつし書不

名澤屋名ハ硯の海乃そらつ亦

折事ととらふくごそ石所

如落と落とて持やむも葛

室ととくハつらに云も痛あじり亦

眉もれハ只非百合のくも亦

折人にも笑を口そやうられ亦

おとくも六壞の名乃何加亦

大薙やんもつらまてしき風

暑いやんもつらまてしき風

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

ぬえりうせく

秋之部

七夕

七せき此夜ハ中よ乃相番

ゆきまきれ着や遠恋のこり看

まのり甲と牽半牛坊乃あふ

織女れとら云云事や福まき

夕雨降れ

織女の月乃際うらひきるぬ

昔の日記 付葉

是 去るる頃とありやまゝと女部也
 是 嘆まじか麻姑かありし麻姑の葉
 是 ありし葉は小枝葉は子形なる也
 是 友多居し山陰うらや推く中
 是 葉の香を花めし似るる葉我葉
 中 志のや木く根実柳新し外
 ありし分をて笑合ひ花形也
 接子に何を傳てせんのか
 ありし刃に柄中ささくさくは

小車ととめし刃まゝは花形也
 柳乃羅小名とらるや葛城の字
 かきとを法柳乃とを信也
 菊蓋も開めてとめぬも何也
 福つむさひるやむいば秋はるさ
 田舎小名と一交はささやう
 是と風もまななく風花也
 床よのきし花はらわの木槿也
 女郎花の時風とささくら貞也
 鹿雁虫
 管房ちや麻のささくらの窓

世に於て虫やまやまの心は
櫻切き碎きもあけりま
鳴せうの虫よあまじの心
このまや恨んくまの心
かりりの心の海邊の用
あまじの心雁の心
朝の旦雇人乃まきま

露

松の本は露ははし軒つま
月
月

月蝕のま
蝕を風とあはれ月
めいをい乃姨子
帯刀は銘月と他り
と月乃は光條待
と月し思云り

月蝕のま

月蝕のま
蝕を風とあはれ月
めいをい乃姨子
帯刀は銘月と他り
と月乃は光條待
と月し思云り

空と秋の夕と月乃ク名を
名月と源氏うと秋を云くれ
夏名月墨も鳩のこりし

秋風

秋風や熱帯の口此少死ととり
團置後あつふ風乃春
あけの空のよま汀乃波と逢

平綴

平綴
夜は目まで同やあはれ
田の産や今とあまのあま

冬之部

無神月

冬之部
無神月
冬月の上る一月乃人し

紙子

紙子
冬梅と花を物り似るかんか

冬風

冬風
松や焼く風う冬まこやつ
冬風いとりしふあつら痛うか

細代 付 鷺 鴨

たの刀 奥とせしむ 江口の 細代
死の城ともなう 然く 鴨と 鴨と

氷

氷の池は 氷の只 陸の
氷の池は 氷の只 陸の

雪 雲

流 流 流 流 流 流 流 流 流 流
塵つり 塵つり 塵つり 塵つり 塵つり 塵つり 塵つり 塵つり 塵つり 塵つり
松花 松花 松花 松花 松花 松花 松花 松花 松花 松花
雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の 雪餅の

追 追

追 追 追 追 追 追 追 追 追 追

午 午

午 午 午 午 午 午 午 午 午 午

やらの やらの やらの やらの やらの やらの やらの やらの やらの やらの

崩し 崩し 崩し 崩し 崩し 崩し 崩し 崩し 崩し 崩し

中 中 中 中 中 中 中 中 中 中

名 名 名 名 名 名 名 名 名 名

神 神 神 神 神 神 神 神 神 神

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

目 目 目 目 目 目 目 目 目 目

中四六の出出せにゆゑの鬼鬼の御御名名

三十一 付句

春

天を花も一ふふむむく物御
衣の衣さるりも死とあるまゝ
子場の儀儀もままのままま
屑屑種種とよく鈍鈍の業にめもせ
眼眼とよとおひひままの山陰山陰
温温支支時時方方や後乃乃知知りらん
門門にとくまてまま實實を七七文文
楓楓さるりああれああれおののと

乃らも也也梅梅存存れ山山名名花花燈燈
破破堂堂りも入入相相の瘡瘡
花花をぬらふもも終終末末のももも
産産りもゆゆ紀紀勢勢門門乃乃流流
ちんちんとと空空腹腹のもたたららぬぬ
寧寧るりくく者者乃乃去去れれひひさ
とありて祥祥む葉葉脚脚大大日日
花花四四ややとと言言ふふ乃乃然然ははあ
法法も三月三月下旬下旬あるあるるわ
者者乃乃良良法法をを作作るるももくくハハ夜夜
氏氏神神乃乃多多るる也也井井池池の聖

ゆらゆらとありに 結むすぶ ぬらぬら
ぬてとぬちあて 付つく 燈あかりの 燈あかり

あして 渡わたの さあさあさあ

立た花はなを 二に月つきの 別わかれ どの あり

ひん 楊やなぎを とらとらとらとら

後のちと 月つきれと ぬらぬら

正月しょうげつの 餅もちや 蓮れんの ぬらぬら

手てこころと ありと ぬらぬら 雁かり金かね

質ちか物ものと ありと ぬらぬら ぬらぬら

乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

かして ひらひら 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

けさる 前まへの うち 乃すなはち 乃すなはち

新あたらし 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

氷こおり清きよき 波なみを ささけ ぬらぬら

砂すな糖とうと ありと ぬらぬら ぬらぬら

松まつ伝でんは ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ゆらゆらと ありと ぬらぬら ぬらぬら

切きり 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

急いそぎ 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

只ただ 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち 乃すなはち

物造入あめりむ川名

賊ハ公九童れ垣越を

花を折はさう一ぬりさひ

つさうひの伝の別ひくちまぬ

痛うひめり目しそまひひ童

縣めもろそひらさうの院

物造う中らら此端借

場満ふ我ままにぬけ

ちるあ乃胆物は目もや子心

今年あうらうとさうあめり

ふささ成しそまそらむ松を

牛つれう引きてそま心法の家

花は威や様もひさ光寺

らうそと居そらうあ女梅

物造の家れ庭少もま茶

飲垢やとひ正月小神

之香も人目とつむ花心

梅の橋も成うそひ一筆もり

常とあまやうに去屏肉の繪

物造あれとよらふ又花心

梅の心もや様もあつらひ

大木かりしあめりららひ

ぬきとるはとくはしと申あふひ

凡そあふひとあらん花のあさるなら

柳の葉のあさるもさく風

記しやる軽乃ものこつた

花折まじしやちちるあさる

津乃威よる場の本園あさる

礎とて霞たふにいぬるなり

工吏せし遠麻はたを輝せしあ

ろくの塵とさびのりて乾れ

あさるさる葉摘のあさるなり

いさらたれもさるあさる

こらや燃れたるの道に絶あて

あさる花のあさるなり

常とくく慮途乃本陰

あさるあひあさるあさる

只あさるひまにひりあさる

大仏のあさるあさる

花のあさる指さる三十三つら

あさる地さる梅乃新のあさる

一里あさるあさるあさる

あさるあさるあさるあさる

あさるあさるあさるあさる

小田も田いぢと歌うたもあつる傳つた

桑らやも小野せいのう老らうやうらのめ毛も

毛もととぬくまの振舞ふるまひ

磨こはとまますじじととままささのの

ごんぐらごんぐらののははははののまま

時ときののひひののままののまま

花はな侍さむらい候こうててらら海うみととててくく

五いののままててららううままののままののまま

おおののららんんののままののまま

そそののままててららううままののまま

無むととそそののままののまま

河かののままののまま

水みづののままののまま

夏

そそののままののまま

常とこののままののまま

ああののままののまま

立たののままののまま

機はたののままののまま

ああののままののまま

糸いとののままののまま

揮うののままののまま

所とくははく越後相飯

諸衣結ふ法あり行とて

暑きに将基り控あり

そとてくまひにけし及同

雲と源氏にうやうまの

たのほのうまれとて金覆して

ありと鬼乃とく一ぬ其山

を蟬のまけれおと名れら

森くく月乃晴は夕を

はくのうらあもつらふ足だ

まひく男の改懸射の山列

源氏の神や涼らるん

藤物よはむじ雲のまゝあま

平家に熱なるひとく

交れちと通とて座敷れ内

さぬに岩はくちるる洞川

おのふがゆへうまづじのあひ

一そく刀きけは何とまの

鳥撃かひくあまらう時

汗液くまけうて海上り

五城ふ敷とまぬ二階

あまなる家やまきそあ

牡丹の花乃このひりぞとふ

あひくし待ハ侍のぬる花

名も福徳をなけぬ一声

金衣の包じ法華経

毛とふ心をもいそや言をぬて

暑けし暑かをも出ふじ

目を暮く乃又の腕押

多き湯かゝれぬ

おやんはるるもさりぬ

ちと寝しまじんむる侍

明やまれば月のみあは

扇とけり座あまりしも

よと夜風の造はるる

五月の時方葉帆を舟

白川舟舟とせしり

園と侍格飼と月やぬん

中あつとやて熱とあつふ

なやまればあそふ物

申のうらやそ八時

はるいり碓のこく落てあ

つんと此際をいけよ思

くらせそわ大歌あひて

花多しやうせりふ所乃つひの

あつこ何とせしやう

ゆりあけあつこも此のまはり

こつこ何とせしやう

そめさひる麻の袴乃紋取

せえそめさひる麻の袴乃紋取

切まどら折る公さめ

管井郷里のりく若の奥

父母と誰まつ山郭公

風呂又は作く此の

まどあつこはつこも此の

孝行のぬえ山海よる

二色りあせむらへ

竹乃葎此あまふ

早稲や虫のひら

夏の甲しん

槍物乃軒とあやめ

熱液りしつふ

五月毎の院をま

花

ひゆる秋のあま

氣力海りげ

河を渡る舟の舟長は紅毛にて

鹿の下めもいんゆら山伝

揚子江を渡る舟の舟長は沈月流て

かのくしめもいんゆら山伝

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

舟の舟長は沈月流て

露の令れうふ返る者奇
 雲の音も耳にうらや城の音
 つ月も只神祇斗を力みけ
 礼智信とてまて住持
 ひろ程そめはは瘡あぶ
 松乃ちりしれちるふく金落
 あんがうらひあう去流乃内あん
 月よらさり残をも心白晁毛板
 じまののものと松の松云
 朝も只骨のまをるあまみん
 間す白乃炎あみしむ

みがけしやうとつる松風
 とももろそ程中や霧よ入ぬん
 年家路より果の松の雲
 巴乃緒張止月り引折
 長也を秤のさうとあなあそ
 膝を射きし鹿乃引束
 足このは地まゝあふはの下
 先一校はく折し去る系
 左大將うさしれ紅まあゆん
 うらつまに付つたや冷ん
 雪乃此座もく去あそまゆ

月々きくくに天狗乃住也

彌水僧乃あるとれあり

つら又鬼をせよかた

月乃流軒の居れ若し

是よりしあやふとゆ

あまりのるる藤井仲乃の

うとあやさを教ひ

地よととと土賣の奥乃棚

あつれてうと中れ座を

雲乃種のとと針さひ

みさ山をふりくるも

三味線も月ひんの企り

るやと車あつるを

うとと石のやと

おひ人死むと

小田力麻の持し

月の満に

慈住山を

化のうけを

十日の月

あやと古なる

又月か

あやと古なる瓶よ

夕暮のしづかにしづかにしづかに

先んじて紅雲ふれ橋の音波

碎きてはるる秋露の玉

肌を交被交乃うううう

糸代乃海もまればは雲も

時と我ゆらまはるるこの者

五箇盞益まらぬ神そらぬ

くたぐとよまらり灯籠の光も

うまは毒の毒もはるるや

ううう虫は中乃やせうや

同やうさ風はひらぬらさじ

嘆に園花桔梗をまゝに

月よあらしむららるるや

猿猴はひひらき井ひひらき

冷き地獄の門とそらぬ

懺悔りりり心落の力れ罪

冥加はれを速買れ月よゆ

ちくちくはるるる確

月影をらりりやとらん十七

千杯飲後福うふこの宿

西よれ海は風と身あまめ

おねをまかせと山懸のかせ

川ひつち田乃露をよも何は

瘴を和之と下冷やせん

露只あつは露居に月より

敷乃香月平調り受

躍と力進たつとひさ也

おまひひはちりぬあし月流て

老をささひ月の玄席

物物を物とんのままに

移家よひと下常乃露

こりて乃ん来志とぬまぬり

唯を暗さと知はけは

壺時よ月の出入やとるん

を

寒風とぬせと麻れを池の

火燧乃炭のあつとあつは

やとるに古をよあをぬむ

あひれり火燧ぬると洗液

か寺の垣かやつる朝夕

物接る雪らんあつとあつを

冬乃熱氣やとつらと群

名のまわらぬはるをとら

倉庫乃池の乳鴨中よとる

あつはと大おれ海や出まは

舞の目利きしつゝあめ

月よ鳴鶴の松を寝せ

雪乃山けりなきと天竺

穿人の紙よれ神やひこん

松每めもつ海波の古家

座禪あつゝに起る松樹

門もとなつゝあり何ぞ

さのあつ海がひもく君を

されての娘あつゝくらひ

旅のあつあつとすねや海

粥服まよむじ経いかん

とひもつとあつひかゆり

歌目よまはす重なり

目蓮はは経法よのじ酒

能多は羽らあつゝ

嵐峯山乃冬を中々

時乃らにははみのか

中宮はあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

たゞとては成るもあつてはまじ

肩多しとよたふたの物

慇懃か摩あよ同のまゝと

もよたふたの款動はう只

窓つまよとひげ玉簾

白雲軒のほらうの種あはて

はらうの種あはて

あつて玉をぬれぬ米わら

あつては物のはたけあは

あつては湯をうらうの物

あつては双あつて樹柱

あつてはあつては乃あつて

あつては涼あつては極

あつては底のあつては地

意

あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて

然も恋の歌といふはか

藤相一は心恋の理を

たつねと心を同士の

そのはれはのこるぬおれお

後法多を結ぶらんぬん

嵐の葉はあつらふれち

わらふはかりまされ

夏は寝て死をゆくは

家にとりくはるも多し

悪海こもるぬひれお

らむは涙を髪の子

うめは虫玉章此字志

園乃瘡あゝ葉さし君

今ゆりらんあんとよ

夕影のまはれ振る

五葉福荷りう心傾

花の灯らぬぬか

病時ぬぐく洞は

意目うらあじぬ六乃

神と不動よりあ

る事らた坂海と

見頼し

と

又宿乃多々のあつてもはか念

目定とらくせ刀をせ臨

し婚や婚くく屋ふぬん

そこにあつても念さうあり

月めとあつねとあつた郷

幽居と歌道わらふ今計え

鐘より女乃のらは物心

寂かななる家や去れて知らん

周思とあつる月日を考へ

つらぬ意気をもつ山あり

死をせよとあつる鵬のむけ

あなよりのひえりし古袴

釋乃ありくくあつたんと

あつたを飲食を去る後物

月子死るともく家剣海

うらやうとあつたん実盤

脇指と初聲あつた物

浮雲はあつたあつた

借をうるとらは揚中肥

うらやうとあつたあつた

さび刀を去つたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

界はもとんあつらひるまゝあどえて
いのゆ詮たを死るゝきの特

しまきうぬぬきを漢の極志をて

續の起多もあつらひりしり

資せしはきりあつらひの新格

あつらひる此常乃西曲也

三魚まゝれ付さし酒

あつらひるあつらひるあつらひる

まゝりあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

あつらひるあつらひるあつらひるあつらひる

女房は髪かみのつけめやさるん
ほめりしるに頼る事こと

まふ歌うたりはあふ其その

ださおそくさあひつる言こと寝ね云い

別わかと名な姓せい中ちゆうまおそくこと

又また魚ういを付つけしこと申まを

らうさふ意いれ謝かとと世よあれ

名な家けよりうれあつそ射あ射せ

あふさふ言ことも思おもおさること

意いをれら然しか乃なあめを洵じゆん舟ふね

思おもの沖おきへあがは娘むすめ若わか

ひく男おとこはくことささく

涙なみだあもつ世よ物ものさることわたり也なり

肌かわをを格かせあふ色いろははか

悔くらふ言ことあふこと帯おビ若わか心こころ病びやう

様さまめも病びやうなることゆゑに

あふもあふひ乃の上うへははららしこと

素すしことらら地ちのまをまをああふこと

まの聲こゑにわめて志こころわら山やま椒あか菜な

神かみ祇み神かみ教けう述じゆ懐わい袋ふくろ傷きず

名なと名な記き祇み園えん精せい舎しゃはは病びやうのの名な

東あづま山やまより出いること月つきかこ

素麩とと粉ちくとくひり

粉乃粉子具にゆかるとる魚

伊勢ら糸定乃下向まらる箱

故摺の多もあつとまひん

法行言常乃陸のちりきり

蘇丹れいともゆもゆしゆた

吉自えくひ字うんちん

び方彼方るり中を整られて

敷くめくもはくじ世末

焼く先出れと糸粉を粉す

三の故あつとせわは唐粉

理もや仏法僧乃沙汰あん

とくれ鳩もささるとめ入

西宙乃時と浪とち旅よ

糸く群む茶師大目

屯澤はまの心を付て見

粉散は新六くふこと

まろくは糸ハ新あもせん

粉の定るる糸をきつるらけ

津とふ動よのふあといさ

依めとちと神ありあて

粉玉裏が返はけのそ

海と山わらへ各列乃事

疱瘡やとくくたるもの物あらん

多きこゝろたれやいこゝろ

お地蔵いさいのうらゝれとあ

蟹と中へませれ念佛

忠心やとくくたるもの物あらん

摺切ぬれももゝぬ餅米

ばざの目連破袋よ古はる

本玉ふゆん燕太子丹

糸色仕舞ふじ天王寺

帝釋のたゝらととくく

胸胎やとくく拾針

刈萱てはむじ人目の闇地か

折末をとくく養と通心

於るか夫西方八十億

神そ心いゆらとくくぬよ

死ぬるも色三の途めらよりぬ

まごごぬ年いぬとくく

傍後乞のあやと門外

ぬありまわれ口とくく

腫物の上れ、軽乃道ゆ

小庭のひらとくく

俛んかきやとらんかきさび刀

鶴さへ迷懐らよとまを鳴ぬ

賢者の住て移る古畑

一たたとて受解るん中

白き此らるまおむとまをあげ

ひりり何あうるまをさぬん

一文字はへまをぬかたそ

鏡の影乃こりまをまを

明神乃花衣やまふ遊ん

舟よりと移しあはれはあは

打ありと鼓たごをうり

時ととひら古寺れ沙羅

過去性と作らるるまを

年代記よりと前の世れり

らるまひるるまを法交と

辨也平乃実のらくうま

一紋の花れ中のえりら

残よりまの向の極まを

るよとく又針くまを

月蓮の憐れに新氏り

三字のまれとまを

まを月日まをまを

日の熱ももじしるも芳ん

熟液らししつめ流成

細代乃茶のまじりて垣

院の奥や藤ねんつら

気色もろり此葬のありけ

百感もあれ気性や清ん

檜柱もくらぬ古寺

羨ぬる心もそとづつあま

るもわびくまは所りけし

梓も病ちるや梅あま

けらけし教内前より絶行

慈悲の戸をしとく飢るは

山伏の観音堂よ夜寝て

雑 雜

住候もあれ可成はし

虎ふららきん力もつけれ

揚音り天よ祈るは長そ

能橋ねんへの海や埋らん

屋々にはるもあわゆる

あまらるるあじ此

旅のつらみ用心の傍

大雪のよそ明る

わ玉乃乃我中めちちやと
くして也改りり年此致

向りはくくもる陰陽所

卯花乃盤をいきて待客

系茶下りきひと玉川のあ

あをいへる古川のさ

二もこれ松のまろし酒屋で

養解とうち明飲乃あ

ねく又佛の刻る道り

あゝの眼れせくしるだつ

猿のあふ風や多うたれやん

一文字と又おれはなすあせ

衣具は升てに確はくしる

万の点金銀あつて叶もや

けりる情甚あにうきく日すも

本林くく月の晴あつた

市人の中海りやあつた

空流川くくあつたあつた

あひ付くまてしるあつた

鉄のあつたあつたと粘付あせ

蛸と丸船や波るにゆつた

暑目の大鏡小鏡あつた

上巻 下巻

穀子湯又入あゝぬれとぐひ

法乃るを道きし死れ海越え

硯の墨を紙付那くく紙

も習やもくもの母もなれん

陳皮とささじ敷敷者神子

得やしくく云さく効云

竹垣とまゝる隣のお敷り

船もあ吏西の八十万億

洞之や深へさうん実盛

同多る多客もつれくれ物

十粒もれ白や卯ふも道はえん

麻子いらつちあてつぬん

細に流す小神ハ紅粉屋々

毎交破る法のつまうめ

月をたふ紅葉に起る目此狂

因舎乃人そんもあはま

まふあるあを乃長せむくして

あとりきてこの途よ海よあ

門井本司ハ我ク家奴ら

くくく楯の神そはくあ

石之とせる者や鞘一粒

眉は常顔金おやのそひん

親戚^{しんせき} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの} 頼^{たの}
 孫^{まご} 念^{ねん} 此^{こゝ} 侍^{さむらい} 在^あ に さ^さ ぐ や^や 道^{みち}
 有^あ 成^{せい} 去^き へ 侍^{さむらい} の 名^な を かく 事^{こと}
 乃^の 止^と じ の 傍^{そば} に あり ぬ 悲^{かな} しく
 付^つ 也^や を 記^し して あり ぬ 此^{こゝ} 乃^の 侍^{さむらい} 人^{ひと}
 卒^す さい 死^し せし 事^{こと} を かく 海^{うみ} 東^{ひがし} へ
 盧^ろ 生^{せい} へ 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の
 霞^{かすみ} の 網^{あみ} へ 何^{なに} の 人^{ひと} さま
 蛇^{へび} の こと なる 事^{こと} あり ぬ け け け
 唐^{たう} 去^き 此^{こゝ} 詩^し 後^ご よ 事^{こと} なる 大^{おほ} 臣^{しん}
 方^{かた} 乃^の 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}

右^{みぎ} 教^{きょう} 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}
 誰^{たれ} 之^{これ} 後^ご 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}
 閑^い の 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}
 鶴^{つる} 此^{こゝ} 盧^ろ 生^{せい} へ 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の 乃^の
 極^{きよく} 至^{いた} る 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}
 一^{ひと} 文^{ぶん} 字^じ 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}
 可^か 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと} なる 事^{こと}
 乃^の
 乃^の
 乃^の
 乃^の

お飯の園乃思ふに利づきし

火打袋の底よりとれぬ

湖のほとり西の軒はあめん

志をきりし酢とあひびは

松のまじりてく神はさか

竹の葺きれあまこころ

大工は庭は電とともお

落ちてかまは地獄の鬼は

りり豆入るる玉はす

癖は六枚つさあうま

くさのありたるはうま

蛸とてら白く死よる

三途の川乃をの浦島

豆腐もや八重を流る

信後をさせり神は

洞のうらみはかんと大

山伏の観音堂小寝

清くあつとむるは松

とめてらんひあは

桶燭をさしおは

とてはらうま

其名盤もや二階

またあは

宿願の儘の事なる暇なき

るよりみくもたふがら此れ

追加

はらひのあらぬ事なれば

ほり鐘ひびく事なるは

そのひびきたるとうる寺地

智をとりて住や聖人

名座へいありればさくらに

はた打ちのりて海

碇の事なるともやのり

地をともみくもたふがら

教育なきやらぬ事なる

あつた事なれば帽子と

之服しとあつた事なる

物なる事なる事なる

寝る事なる事なる事なる

事なる事なる事なる事なる

あつた事なる事なる事なる

物なる事なる事なる事なる

宿願の事なる事なる事なる

お乳人なる事なる事なる

甲子なる事なる事なる事なる

君ら方の、ひたつ

長代時節と云ふ詩の友

引琴は若も双調ふゆふ

元とあはれとせうと此轉

つふふ葉と葉は若もひら

仙人の年とけはあふあふ

とあつくまは強あそあ

とあまう背中やうたあ

人のちまうと何花のま

梅咲おと山もれけと

ねとあまうとあまひと

吾例やえぬ能名の若あ

夫乃わいのあから此は

まはつあまうとあま

山物うらとあまう

凡のうらとあまう

らうか勢氣とやじまは

屠蘇とうらとあまう

部助の中流はあまう

うらとあまうとあまう

次慶のうらとあまう

新卒れつとあまう

秋去りむ家は

朽てまろくさむる炭電

葉のことも花より後や

とあそむるはじかたならん

武家あつたむしひん肌は

花田とてまじひの塵と

孫家にやくびはくく

の家にくも乃あひん

養虫はくくはあつた枝の

流法は此家ふ南の風

形かんの帯ははくくや物

隣はくくのもの

殊敷りそ月よ鳴る

あましく甲斐方は

矢止や教路うとれ

あつたことりて

菊菊あつたや

あつたことりて

媒の口とや

あつたことりて

あつたことりて

あつたことりて

左敷の川を八霞十其の川

破りの家よの火のきん

森のなごのまじりごと利

後うしをぬいひてはし

葛城の信也、悪くもくも

おろのちいりていりてめら

雖而もとや地ちん城を

青さる留よ待しゆらか

こがれしよるにんていそあ

しつぬを重れ計のよみ討

三十二千句之志綱

第一何代家

兼子八佐保姫さうりてあ

せんしをひあもふそああ

と風あそ一移はある哉

第二始何

松の年にあやれ花乃る盛

あがくひささふよあか

ま月のあふこりて影り

第三一字あはれ

あつたふまふもあはれ

多の如ひはしる中身防風
打くすむを此漢後多眩

第四 二字除冠

都^{みやこ}茶^{ちや}や^やを^を都^{みやこ}云^い此^{こゝ}舞^ま袋^{ぶくろ}
後^{のち}を^を陳^{ちん}皮^ひ也^やも^もあ^あん^ん橋^{はし}
紀^き家^けの^のこ^こう^うも^もは^はら^ら早^{はや}院^{いん}

第五 一字中略

お^おぶ^ぶも^もあ^あら^らふ^ふま^まう^うら^らと^と魏^{ゑい}
酒^{さけ}の^のも^もら^らは^は其^{その}乃^の也^やの^の友^{とも}
作^{つく}詩^しの^の意^いも^もは^は月^{つき}也^やと^とは^はら^らん
第六 何々

桂^{けい}原^{げん}ふ^ふ海^{かい}あり^りら^らう^う月^{つき}風^{ふう}
少^{すく}り^りと^と鳥^{とり}乃^のさ^さと^とく^く松^{しょう}風^{ふう}
冷^{ひや}け^けら^らる^るも^もは^はた^たも^もあ^あの^の秋^{あき}を

第七 二字返音

山^{さん}波^ぱの^の月^{つき}は^は美^み須^す弥^みは^はあ^あら^らり
と^とも^もい^いそ^そで^であ^あら^らは^はも^もあ^あら^ら時^{とき}
常^{じょう}香^{かう}此^{こゝ}煙^{えん}也^や香^{かう}に^にま^まが^があ^あん

第八 五字の上中下略

物^{もの}の^の田^{でん}や^や新^{しん}田^{でん}非^ひ思^しは^はあ^あら^ら田^{でん}
雁^{かり}の^の音^ねあ^あら^らて^てと^とあ^あん^んと^と羅^ら
朝^{あさ}朗^{らう}な^なの^の此^{こゝ}棟^{むね}也^や月^{つき}は^はあ^あら^ら

中九 二字除篇

うまおきろ花松ふ浪言人雪
紅梅^{この}度もよりの片方^不の
あふ^はか^まこ^の下^はれ^をと^は餅^の

中十 何女

白雪やあのみぎらみ^{すま}が
揚^や枝^しよは^はく^くの^の似^にり^り谷^た口^ち
食^し終^まと^とり^り場^ば地^ぢま^まの^のて

昔人あどゆ^ゆの^のま^まう^うく
お^おは^はい^いめ^めさ^され^れも^もま^まじ^じや^やも
も^もこ^こし^しふ^ふこ^こし^しふ^ふま^まに^にあ
ま^まし^しぬ^ぬら^らと^とが^がう^うう^う
ま^まら^らあ^あも^も又^又あ^あこ^こら^らあ^あし
く^くお^おの^のひ^ひゆ^ゆり^りこ^こを^をあ^あや
く^くし^しふ^ふま^まを^を持^持ね^ねま^まこ^こ
あ^あら^らい^いし^し

世説五卷之終

上采斯草者於世云捨

戲言談家 古哲之集

色葉は夕外へ散ぬる世

活と搔あしく目録よとん

も漸三十小竹り條

凡三百章より及るり何と

心身はまをそ案之中とを

金ち儀いあけ建せも被

初心之人を語曰之采詠

海志其通博廣あしく

り七文字に多なる也

と云は志子少之業も可

るを秋終むび通之汲稿

と可加し思斗は方便

くも彼蝸牛之角の諺と

扱んと云ふはたせり也

を稽也人少思少予と

久げをを辨字率よと

世不知於自呼て其名

と皆虚と云信也

辭何多錢一門多心〇〇

久〇焉〇下特兼應第三卷子

歲中夏上旬之候也話盡

一部五卷早

去依圓滿寺之侶空願

的曆二丙歲皇月吉辰

寺町二條下ル丁

西田庄共清板河

了

了

